

令和5年度「全国学力・学習状況調査」の結果 －分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について－

区　名	浪速区
学 校 名	大阪市立栄小学校
学校長名	島田　武

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和5年4月18日（火）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数）に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数

(2) 質問紙調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・大阪市立栄小学校では、第6学年 29名

令和5年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

国語では、学習指導要領の内容において、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域において全国平均正答率を上回ったが、「言葉の特徴や使い方に関する事項」「情報の扱い方に関する事項」「読むこと」の領域が全国平均正答率に到達できなかった。特に、本校の平均正答率及び無回答率の状況と、学習指導要領の内容の相関関係を加味すると、「読むこと」「言葉の特徴や使い方に関する事項」の領域における思考力・判断力に課題がある。

算数では、学習指導要領の領域において、「数と計算」「変化と関係」の領域において、全国平均正答率を上回ったが、「図形」「データの活用」の領域が全国平均正答率に到達できなかった。特に、本校の平均正答率及び無回答率の状況と、学習指導要領の領域の相関関係を加味すると、「図形」「データの活用」の領域の系統性と、各領域を横断的にとらえ、算数の見方・考え方を働かせた思考力・判断力に課題がある。

児童質問紙においては、「自己有用感」「達成感」「主体的・対話的で深い学びからの授業改善に関する取組」について、児童の肯定的な回答の割合は全国平均を若干下回っている結果となった。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

〔国語〕

文章全体がどのように構成されているかを考える。次に、筆者が何についてどのように述べようとしているのかを捉るために、それぞれの意味段落の役割や働きを考える。そして、文章構成の工夫や書きぶり、論の進め方について考える。これらの学びに取り組むことで、「文章を読み、理由を書いたり適切なものを抜き出したりすること」「内容を簡潔にまとめたり、箇条書きなど指示された書き方でまとめる」と「基礎的・基本的な内容を生かして課題を解決すること」の力が身についてきている。

教材文の内容の読解のみにとどまらず、「読むための知識・技能」を児童が身につけるように、発達段階に応じて身に付けた知識・技能を「学習用語」という形で蓄積する必要がある。目的や課題に応じてどのように読み、考えればよいかという選択肢を増やすことで、国語の目標に位置づけられた「言葉による見方・考え方」を働かせながら言語活動に取り組み、深い学びの実現につなげる必要がある。

〔算数〕

基礎的・基本的な概念や性質などを理解するとともに、日常の事象を数理的に処理する技能を身につけることができるようになっており、基礎・基本となる学習内容の定着を図ることができてきている。しかしながら、日常生活の問題を解決するために、算数で学習したこととともに、目的に応じて、数量の関係に着目し数の処理の仕方を考えたり、基準量、比較量、割合の関係やその数量関係について考察したり、数学的に表現・処理したりすることに課題がある。また、図形の意味や性質をもとに、それぞれの図形の特性に着目し、図形の構成の仕方について考察できるようになる必要がある。具体物を用いたり、言葉、数、式、図、表、グラフ、絵、数直線等を使ったりしながら自力で解決できるようにする。解決するだけではなく、解決方法を数学的な表現で整理したり、まとめたりできる力が必要である。

質問紙調査より

本校は、人権教育をSDGsの視点と関連づけながら進め、教科・領域の学習を横断的・総合的に取り組む年間指導計画を作成し、地域の施設を活用したり、人材を招いたりして、児童が主体的に取り組んでいる。また、学習したことを学校全体に広める取組の充実を図っている。さらに、児童が互いに声をかけ合い、学校の仲間として認め合えるように、たてわり活動や異学年交流の充実を図っている。

自己肯定感や自己有用感、主体的・対話的で深い学びからの授業改善に関する質問において、肯定的に回答する児童の「自分には、よいところがあると思いますか」「将来の夢や目標を持っていますか」「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか」等の自己肯定感や自己有用感に関する回答は80%前後の児童が肯定的に回答しているが、その反面、20%前後の児童が肯定的に回答していない。その要因は複合的な因子が考えられることが加味して、家庭と学校、地域との連携を密に図り、児童一人一人の自尊感情を高める取組や支援を行う必要がある。「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」「人が困っているときは、進んで助けていますか」等の質問に関しては、92%以上の児童が肯定的に回答している。これは、たてわり班活動や異学年交流等の取組や地域との連携を図った教科・領域の学習を横断的に取り組んだり、人権教育をSDGsの視点と関連づけた生活・総合的な学習の時間の実践の成果であると考える。そのため、今後も継続的に取り組む必要がある。

今後の取組(アクションプラン)

『個別最適化した学びの育成』をめざし、問題発見・解決のプロセスにおける学びの充実を図る。

◆児童の学びを高めたり深めたりする取組

算数においては、日常生活の問題を解決するために、算数で学習したことをもとに、目的に応じて、数量の関係に着目し数の処理の仕方を考えたり、基準量、比較量、割合の関係や、その数量関係について考察したりする力を育むため、直接体験や内発的な動機づけを重視した授業改善を図る。特に、数学的活動を通した思考力・判断力・表現力の育成に向けて、「具体物、図、数、式、表、グラフ等をもとに筋道立てて考え、その考えを表現し、ノートに書いたものを使って、具体物、図、数、式、表、グラフ等を関連させながら説明する学習活動を重点的に取り組む。また、読み取る力を身につけ、自ら学び、自力解決する児童の育成をめざし、読解力向上のための指導過程や指導方法の工夫、適切な言語活動の充実について取組を進める。また、教科横断的な言語能力を基軸にし、「情報収集、整理、分析、表現、発信の理解」「情報活用の計画や評価・改善のための理論や方法の理解」と言語活動を総合的、系統的に整理し各教科の特性と見方・考え方を働かせた授業改善に取り組む。

◆国語・算数の基礎・基本の学習内容の定着と個別最適化した学びに向けた授業改善

算数及び国語の基礎・基本となる「数と計算」「図形」「言葉の特徴や使い方に関する事項」においては、各学年に応じた定着を図ることが課題であり、習熟度別・課題別指導等の学習形態の工夫を図り、系統立てた継続的な取組を行う。加えて、ザクザクタイムの充実と、読書タイムなどの業間の時間、放課後学習の時間を適切に活用し、国語・算数の基礎・基本となる学習内容の定着を図る。